

安藤春彦（愛知県心身障害者コロニー）編集

心身障害児への架橋 重複障害児の治療と指導

高松鶴吉（北九州市立総合療育センター）

愛知県心身障害者コロニー中央病院のスタッフらの手により「心身障害児への架橋」という本が出版された。内容は「重複障害児の治療と指導」という副題にも明らかなとおり、重複障害児の療育についてである。

障害を持つ子どもたちへのアプローチが、局所的なもの、あるいは一時的なものですむ場合は少ない、基本となる障害は発達初期に発生し、しかも多くは短期に解決できるものではないので、必然的にそれらは発達の過程で二次的、三次的な負の変化を引き起こしていく。まして障害が重複するような場合は各科を超える総合的な取り組みが必要になり、発達という時間的経過の中では、保育および学校教育という教育諸活動との綿密なチームプレイも必要になってくる。

これらは従来の医療が持つ、短期一局所的対応の視点とはかなり異質のものである。だがこのような長期—総合的対応の視点を私たちが身に付け、育て上げていかねば、私たちの対応は子どもたちに好ましいものにはなる筈がない。本書はまさに

この視点からの論旨を私たちに展開して見せてくれる。

第一章は総論である。ここで著者は障害自体の説明の他、親に対する告知上の配慮とその後の指導、発達の予後に関する主体と環境の要因について述べ、ついで医療と教育の提携、さらには基本的生活習慣達成の具体的方法などについてまで言及している。

全体が300頁足らずの本であるため、それぞれが大きなテーマであるこれらの問題に関して、詳細な記述とはいえぬが、読者は著者の永年の経験に裏付けされた簡潔でしかも正鵠な論旨を読み取ることができよう。

各論としては、てんかん児、ダウン症児、脳性麻痺児、二分脊椎児、視覚障害児、聴覚障害児についての説明がある。これらは充分医学的であると共に、生活指導の面、家庭の指導上の配慮、教育指導に関する意見などが書き込まれている。

例として視覚障害児の章を取れば、視覚障害児の発見、大切な親の心構え、知恵おくれ視覚障害児の特性、重度視覚障害児の精神発達、訓

練法と補助具、知恵おくれ視覚障害児の訓練と発達経過の一事例という項目が立てられている。このような子どもたちの療育に携わる人々に取ってこれらは大変有効な知識となるに違いない。

最後の数章は重度障害児の聴力検査と言語訓練の方法、障害児の口腔衛生と歯科治療、重度児童の入所施設の保健衛生対策となっている。聴力検査や言語訓練にしろ、歯に関する知識や具体的な歯みがきの方法にしろ、これらは家庭でも施設でも難しい課題であるだけに読者は多くの示唆を受けるはずである。最終章の入所施設の保健衛生対策では、施設の床や壁の清拭をはじめ、施設内感染症の治療と予防対策が述べられている。残念ながらこれも枚数に制限があり、充分な記述とはいえないが、施設衛生管理面での包括的な示唆を得ることができる。

医師を含む医療関係者、保育や施設を含む教育関係の人々、わが子の子育てについて客観的な知識を得たいと願うご両親の方々に読んで頂ければと思う。また執筆者の方々にはこの本を基礎として、もっと細かく書き込まれた大作の試みもお願いしたい。本の表題にある「架橋」をなす医療チームはわが国になお少なく、一方でその必要性は極めて高いのである。

（A 5，頁 298，図62，写真 14，
1986，¥ 2,900，〒 300

医学書院 刊）